歴史地震
第27号(2012)72頁

［講演要旨］　京都御所の泉殿と地震殿の現地調査報告

川崎一朗[1]・髙橋昌明[2]・北原糸子[1]・岡田篤正[1]・鈴木祥之[1]・中西一郎[2]・石橋克彦[2]
[1]立命館大学・[2]神戸大学・[2]京都大学

§1. はじめに

2010年7月、天皇の避難生活のための建屋である天皇御常御殿の「泉殿」と、皇后のための皇后宮常御殿の「地震殿」を視察させて頂いた。

§2. 江戸時代の造営

慶長度造営(1616～1614)、元和度造営(1619)、寛永度造営(1641～1642)と徳川幕府による造営が繰り返されたあと、江戸時代に火災消失による造営が6回繰り返された。

1708年の宝永大火に伴う宝永度造営の時には、公家町を取り巻く今出川通、寺町通、丸太町通、烏丸通の道幅を広げ、公家町の中には公家のみの居住を許し、民家はすべて鴨川の東や仁王門付近に移転させて、現在の京都御苑とほぼ同じ区域を公家町とした。

§3. 泉殿と地震殿の歴史

この節は、『中井家文書の研究』(平井聖、1976-1985)の指図による。泉殿は「延宝度内裏指図」(1675)に記載されていないが、1703年の「延宝度内裏指図貼絵図」には記載されているので、1675年と1703年の間に建てられたと推測できる。ただし、場所は、現在の泉殿よりやや南側である。ところが、「宝永度内裏指図」(1709)では、泉殿は再び消えている。

1830年京都大地震のとき、御所は築地塀の一部が崩壊するなどの被害を受けた。そのあとの「寛政度内裏指図書絵図」には泉殿が再登場する。1854年の嘉永の大火の時には再び御所のほとんどは焼失したが、安政東海地震・南海地震(1854)の後、安政度造営によって主要建造物は再興された。

地震殿は皇后宮御常御殿の東側に位置する。「宝永度内裏指図」(1709)でも「寛永度内裏指図」(1790)でも地震殿は見えないが、安政度造営のときに、初めて地震殿も造営された。

§4. 構造

泉殿は木造平屋建で、正面(写真1)を御常御殿に向って西向きに建っている。主屋は、正面幅ほぼ7m、奥行き4mで、北側に8畳間、南側に4.5畳間と1.5畳分の上間がある。8畳間の奥に、幅1.5m、奥行き2.5mの、取り外しの容易な御厠が附属している。

地震殿も木造平屋建で、正面を皇后宮御常御殿に向けて建っている。主屋は、正面幅ほぼ5m、奥行き4mで、北側に6畳間、南側に3畳間と1畳分の上間がある。泉殿より一回り小さいがほぼ同じ構造と言えよう。6畳間の奥に、幅1.5m、奥行き2.5mの御厠が附属している。

柱は、泉殿は1間間隔、地震殿は0.75間間隔で、側壁はすべて土壁の単純な構造をしている。もともと、泉殿も地震殿も、耐震というよりは、天皇と皇后の避難生活の場として建造された。構造は簡潔であるが、そのため、かえって、耐震的に強い構造になっているように思われた。

泉殿と地震殿を含めて、現在の御所は、1944年東南海地震と1946年南海地震を経験したが特に被害は無かった。次の巨大地震は、1944年東南海地震と1946年南海地震が同時発生した規模の1707年宝永地震型の超巨大地震の可能性が強いと予想されており、1944年と1946年の時よりも一回り強い地震動に襲われるものと思われる。現在の京都御所は、このような地震動は未経験である。

謝辞

泉殿と地震殿を視察する許可をいただいた宮内庁京都事務所と、御所内を案内していただいた三橋康男、藤瀬勝彦、岡本和彦の各氏に感謝いたします。

文 献

平井聖編、1976-1985, 中井家文書の研究、中央公論美術出版.

写真1: 天皇の避難生活のための建屋である泉殿の正面からみた全体像。